第 10 回二戸市埋蔵文化財センター

発掘調査報告会

史跡九戸城跡

晴山遺跡第 50 次調査

中曽根遺跡

◆特別講演

講演「火山灰から考える古代の二戸」

講師：岩手県立博物館主任専門学芸員　丸山 浩治 氏

◆令和５年度調査報告

令和５年度発掘調査の概要	二戸市埋蔵文化財センター	主査 鈴木 裕一郎
晴山遺跡第 49・50 次調査	二戸市埋蔵文化財センター	主任 大坪 華子
史跡九戸城跡	二戸市埋蔵文化財センター	主事 佐藤 由浩

◆令和５年度調査報告（紙上報告）

◆遺物展示

晴山遺跡 史跡九戸城跡 前小路遺跡 橋場遺跡 上里遺跡 中曽根遺跡 枋ノ木遺跡

日時　令和６年３月９日（土）　午後１時 30 分

会場　二戸市埋蔵文化財センター　会議・研修室

後援　(一社)岩手県文化財愛護協会、NPO 法人カシオペア市民情報ネットワーク、
(株)デーリー東北新聞社、岩手県立博物館、九戸城を活かす会、二戸市観光協会

プログラム

13：30－13：35	開　　会 ・ あいさつ
13：35－14：35	【講演】 「火山灰から考える古代の二戸」 岩手県立博物館主任専門学芸員　丸山　浩治　氏
14：35－14：40	質疑応答
14：40－14：50	休　　憩（※遺物展示をご自由にご覧ください）
14：50－15：00	【令和５年度発掘調査の概要】 二戸市埋蔵文化財センター　主査　鈴木　裕一郎
15：00－15：25	【令和５年度発掘調査報告①】 晴山遺跡第 49・50 次調査 二戸市埋蔵文化財センター　主任　大坪　華子
15：25－15：50	【令和５年度発掘調査報告②】 史跡九戸城跡 二戸市埋蔵文化財センター　主事　佐藤　由浩
15：50－16：00	質疑応答
16：00	閉　　会

特別講演　講師

➢ 丸山　浩治　氏　　岩手県立博物館主任専門学芸員

〈略歴〉

1975 年、岩手県北上市生まれ。

弘前大学大学院地域社会研究科を単位取得退学。博士(学術)。

北海道北見市中本遺跡調査団、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを経て、現在、岩手県立博物館主任専門学芸員として勤務。盛岡大学非常勤講師(博物館資料保存論)。

火山灰から考える古代の二戸

丸山浩治（岩手県立博物館）

１．火山灰と考古学の関係

１）遺跡発掘調査の成果は「土」の解釈如何で決まる

・ 地層がどのように堆積し、どのように改変されているかを観察しながら当時の生活面を探り、遺構や遺物を検出することが調査担当者の仕事。

・ 地層の構成要因の一つが火山灰（日本は“火山国”）。突然、異なる性状の物質が堆積するので、見分けることが容易。

・ 火山灰はそれぞれに個性があり、区別することが可能。火山学者によってそのカタログ作りが進められ、同時に考古学者や歴史学者と協働で噴出年代の研究も行われている。
→火山灰編年学（テフロクロノロジー）

２）火山灰が持つ性格

・ 広域性／共時性

・ 絶対年代指標（編年研究における鍵層）として／火山災害を考える上での物証として

・ 広域火山灰（噴出源から数百km離れた地域でも確認できる火山灰）は、考古学上大変重要な指標となる。

３）火山灰を細かい年代指標として用いる方法

・ 地層とそこに介在する火山灰を観察し、堆積過程を探る（遺跡発掘調査の基本）。自然堆積か、人為堆積か。

・ 堆積様相を分類する。

※ 時期の近接した複数の火山灰があれば、より詳細な年代推定が可能。
（10 世紀の北東北に関してはこれが可能）

２．十和田カルデラと二戸

１）火山・十和田

十和田は青森・秋田両県境にまたがるカルデラ湖で、現在日本国内で 111 か所指定されている活火山の一つ。現在のカルデラ形は旧石器時代（約 15,000 年前）に形成されたと考えられており、その噴火は“破局的噴火”と形容される規模であった。

２）二戸市内でみられる十和田の主な噴火痕跡

・ 約 15000 年前	市内の大半が火砕流で埋積され、全域が細粒火山灰で覆われた	・・・十和田八戸火砕流堆積物、十和田八戸火山灰（To-H）
・ 約 9300 年前	市内全域が“ゴロタ”で覆われた	・・・十和田南部軽石（To-Nb）
・ 約 6200 年前	市内全域が“アワズナ”で覆われた	・・・十和田中掫軽石（To-Cu）
・ 10 世紀前葉	市内全域が細粒火山灰で覆われた	・・・十和田 a 火山灰（To-a）

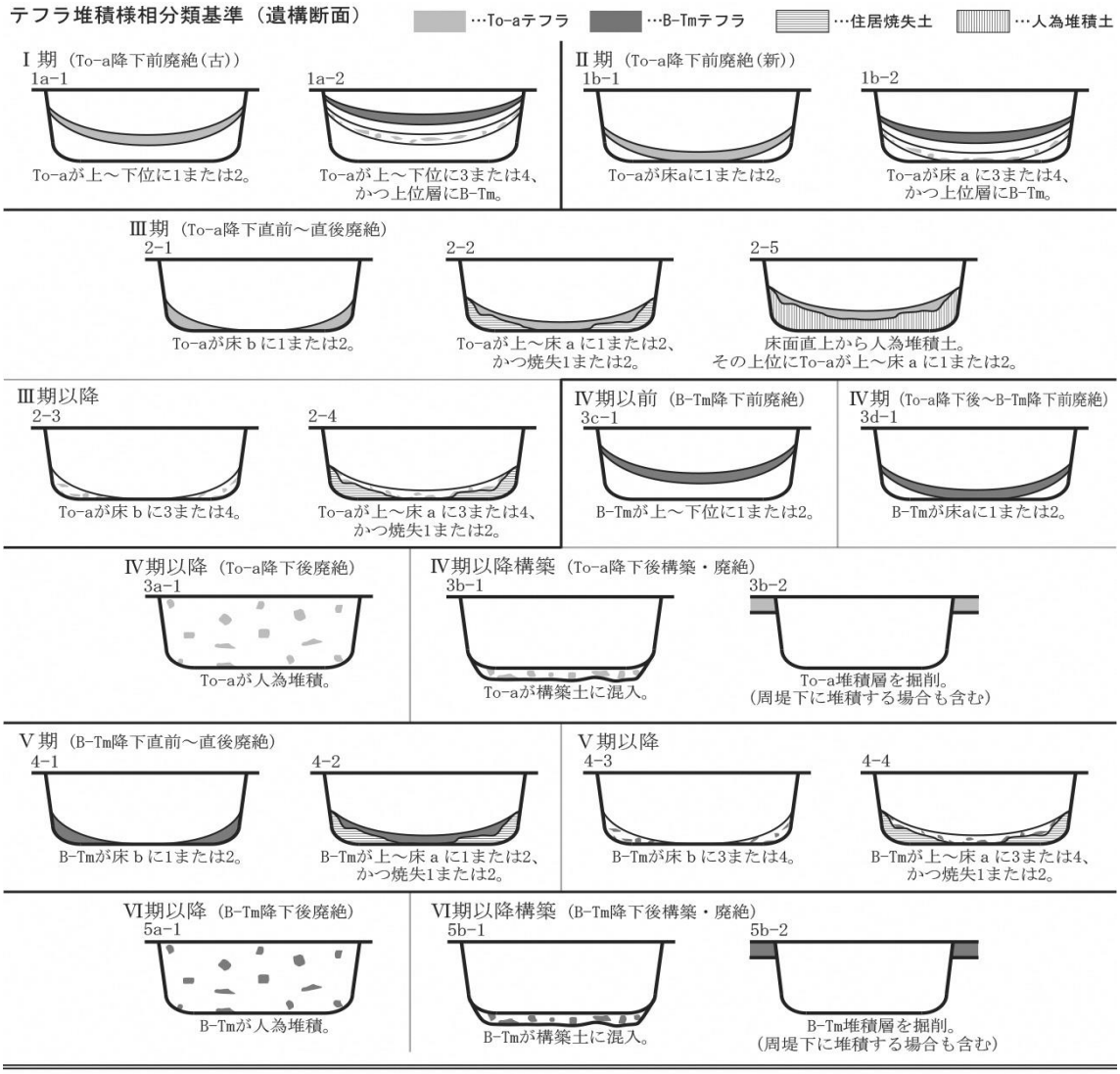
→To-a と、その数十年後に噴火・降灰した白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm）を鍵層として用いることで、二戸地域の古代集落（おもに９～10 世紀）の様子と、過去 2000 年間で国内最大級の規模といわれる十和田 10 世紀噴火の影響を知ることができる。

３．火山灰から二戸の古代集落をよむ

前提…当時の岩手県北部（おおよそ北緯 40 度以北）は、古代国家（律令国家）の直轄領域外。
　　つまりエミシ社会域だが、地域によって国家との関わり方（濃淡）はさまざま。

１）火山灰が介在する古代の竪穴建物の集成と分析※

北緯 40 度以北の主たる居住施設は竪穴建物。これに火山灰がどのように介在しているかを調べる（図１）ことで、建物の廃絶時期（場合によっては構築時期も）が分かり、地域ごとの物質文化の特徴や集団の動態を知ることが可能となる。



テフラ堆積層位･堆積状況･焼失状況の分類基準

	分　類	状　況
堆積層位	上～下位	覆土の上～下位に堆積し、床･底面に接しないもの
	床a	竪穴隅以外の一部で床面と接し、下層を有するもの
	床b	隅･壁際に堆積し床面と接するもの
堆積状況	1	成層するもの
	2	断続的に成層するもの
	3	粒状･ブロック状を呈するもの
	4	「混入」とのみ記載、もしくは具体的な状態不明のもの
焼失状況 テフラ層(複数ある場合は下位層)が焼失材･層に対して	1	直上位
	2	同一層準

図１　火山灰堆積様相分類基準

※2010 年 3 月までに実施・報告された発掘調査成果を対象に検討を行った。

２）火山灰からみた市内古代集落の消長

市内 40 遺跡・486 棟で To-a が確認され（図２）、うち 38 遺跡・418 棟は時期区分が可能（表１）。

馬淵川中流域・十文字川流域

22 遺跡・306 棟中、21 遺跡・265 棟が時期区分可能。

→Ⅰ～Ⅲ期（To-a 降下以前）の廃絶が全体の 80%を占め、特にⅠ期が多い。

安比川流域

18 遺跡・180 棟中、17 遺跡・153 棟が時期区分可能。

→Ⅰ～Ⅲ期の廃絶は全体の 20%にとどまり、明らかに噴火後に存在したと思われるものが 30%を超える。

つまり、馬淵川中流域・十文字川流域は十和田 10 世紀噴火を境に遺構数が急減し、反対に安比川流域は増加していた。

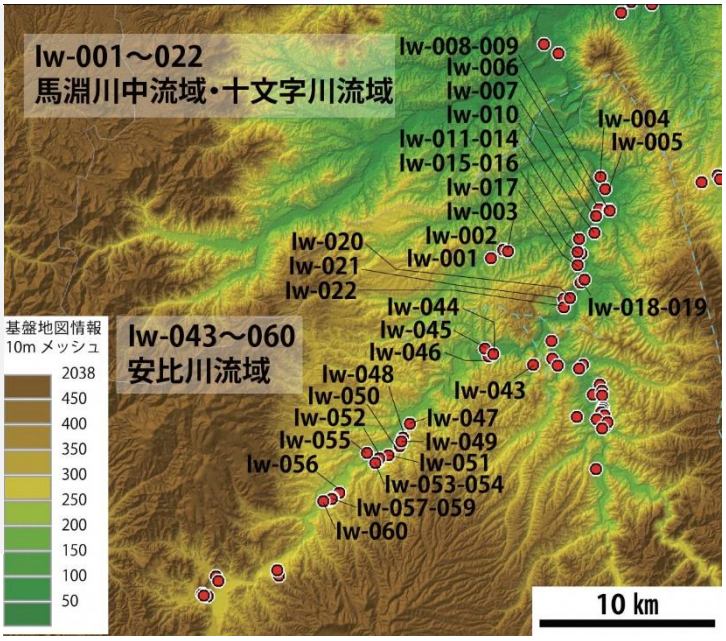


図２　対象遺跡の位置

連番号	遺跡名	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅲ期以降	Ⅳ期以前	Ⅲ～Ⅳ期	Ⅳ期	Ⅳ期以降	Ⅳ期以降構築	Ⅴ期	Ⅴ期以降	Ⅵ期以降	Ⅵ期以降構築
馬淵川中流域・十文字川流域														
Iw-001	門松	9												
Iw-002	寺久保	4												
Iw-003	上台	8	1	1										
Iw-004	駒焼場	5	1		14	2			2	16				
Iw-005	馬場	8		1										
Iw-006	荒田Ⅲ	1												
Iw-007	上田面	24		1	1									
Iw-008	戸花B	1												
Iw-009	戸花C	1												
Iw-010	堀野	23												
Iw-011	長瀬A	3			1					1				
Iw-012	長瀬B	12	1		7					2				
Iw-013	長瀬C	23			1									
Iw-014	長瀬D	5												
Iw-011-014	長瀬	1												
Iw-015	荒谷A				1									
Iw-016	米沢	14			4									
Iw-018	中曽根	5	4											
Iw-019	中曽根Ⅱ	48												
Iw-020	前小路	1												
Iw-021	火行塚	6												
Iw-022	上里				1									
地域　計		202	7	3	30	2	0	0	2	19	0	0	0	0
時期区分別検出比率		76.2%	2.6%	1.1%	11.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.8%	7.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
安比川流域														
Iw-043	青ノ久保	5								4				
Iw-044	桑木田		1											
Iw-045	大向上平				5					5				
Iw-046	大向Ⅱ	3		1	5					4				
Iw-047	天台寺跡		1											
Iw-048	広沖Ⅰ				2					1				
Iw-049	飛鳥台地Ⅰ	12	3		37			1		16				
Iw-050	安比内Ⅰ	1												
Iw-051	大久保Ⅰ		1		1	1								
Iw-052	桂平Ⅰ			1	3			3						
Iw-053	桂平Ⅱ	1			4	2	1	2		1	2			1
Iw-054	沼久保Ⅰ				2		1	1		1				
Iw-055	浄法寺城跡				1					1				
Iw-056	海上Ⅰ				2									
Iw-057	五庵Ⅱ								1					
Iw-059	五庵Ⅰ		1		5	1		1		2		1		
Iw-060	田余内Ⅰ				1									
地域　計		22	7	2	68	4	2	8	1	35	2	1	0	1
時期区分別検出比率		14.4%	4.6%	1.3%	44.4%	2.6%	1.3%	5.2%	0.7%	22.9%	1.3%	0.7%	0.0%	0.7%

表１　遺跡毎の時期区分別竪穴建物数（二戸市内）

３）堆積層厚から推定される被害度

降灰被害を考えるときに基準となるのは、降下一次堆積の層厚である（図３左）。しかし、To-a のような細粒火山灰は風雨などで流動しやすく、当時平地だった場所にはほとんど残存していない。いっぽう、凹地には流れ込んだ火山灰が分厚く堆積し（二次堆積）、後世まで残った。

二次堆積は地形の影響を大きく受けるため、純粋な降灰被害を示すものとはみなされず、あまり重要視されてこなかった。しかし、その堆積量は基本的に降灰量に依拠するものであり、広域的にみれば降灰による被害度を示す尺度として十分に使えるものである。むしろ、細粒火山灰の場合はこちらのほうが被害推定に適しているといえる。

この考えのもとに作成したのが、被害区分図（図３右）である。旧二戸市域の大半は被害区分エリアＡに、旧浄法寺町域はエリアＢに含まれる。

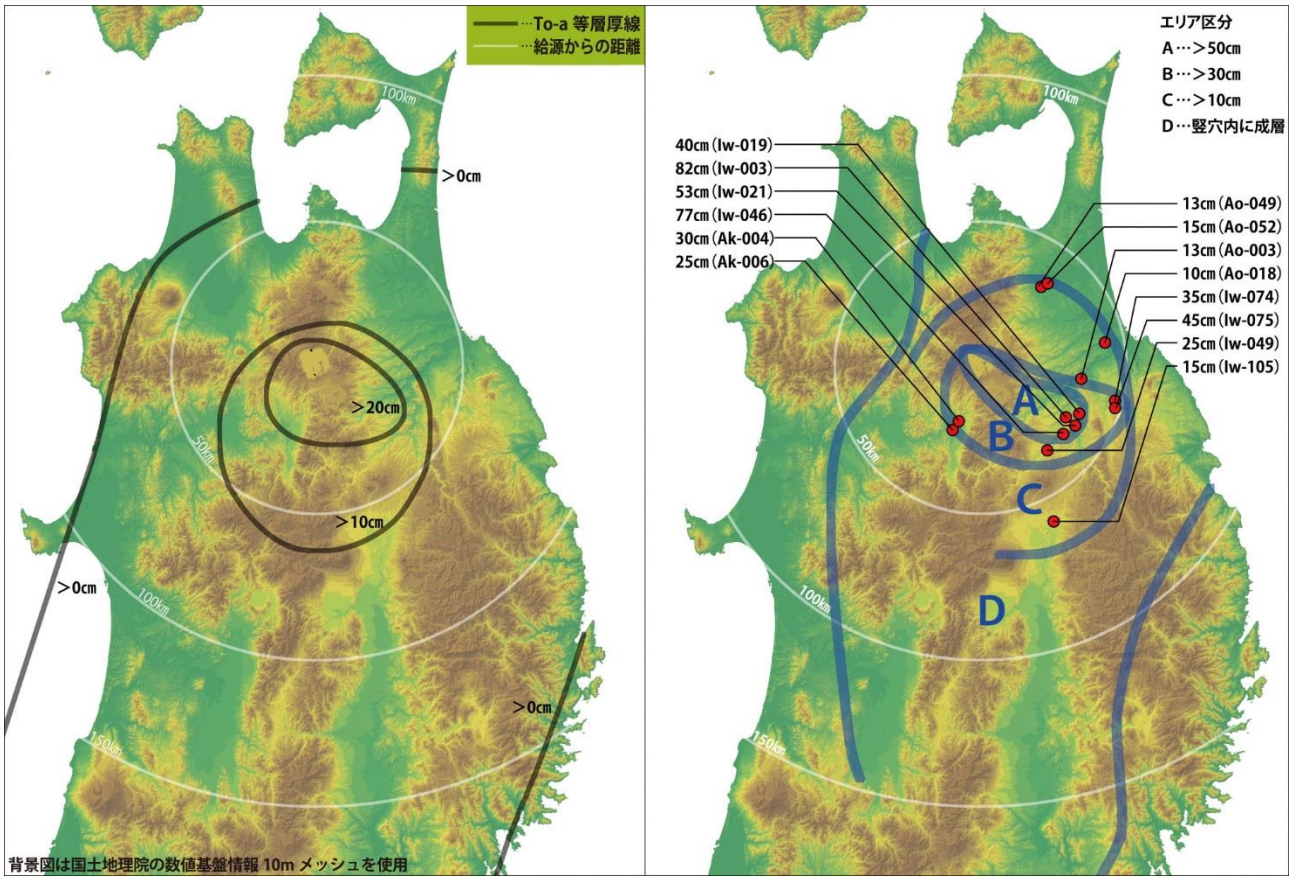


図３　To-a 一次堆積等層厚線図（左）と総層厚から導出した被害区分図（右）

４）物質文化から探る十和田 10 世紀噴火前後の地域動態

不動産（竪穴建物の建築様式）と動産（煮炊具（土師器長胴甕）の成形方法と形態）から、各地域における物質文化の特徴と変遷を分析した。

① 不動産（図４）

定義

カマドが北～北西壁の中央に設置されるタイプ・・・・古様相「在地的建物」
カマドが東～南壁の中央以外に設置されるタイプ・・・新様相「律令的建物」

馬淵川中流域・十文字川流域…十和田噴火前は在地的建物が主。噴火後は建物自体が激減。
→その後一定期間を経て、律令的建物が増加する。これは駒焼場遺跡（Iw-004）などのいわゆる防御性集落で、10 世紀後半と理解される。

安比川流域…十和田噴火前、すでに律令的建物が半数以上あり、噴火後はその比率がさらに増加。
→ただし、噴火後における在地的建物の新築事例（大向上平遺跡（Iw-045））もあり、両者が変存する状態。

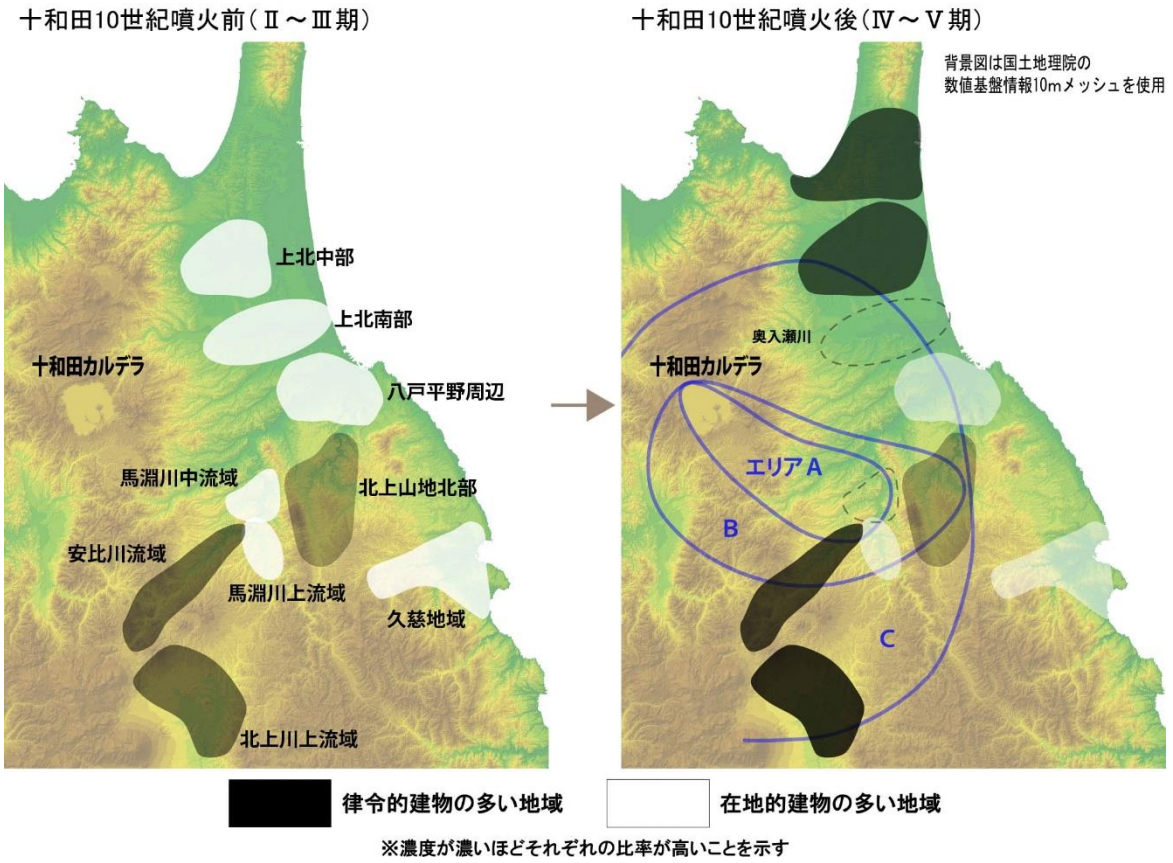


図４　竪穴建物建築様式にみる十和田 10 世紀噴火前後の地域動態

② 動産（図５）

定義

非ロクロ成形長胴甕・・・「在地的土器」	ロクロ成形長胴甕・・・「律令的土器」

馬淵川中流域・十文字川流域

十和田噴火前は在地的土器が大半で、口縁部が長いもの（古様相）が噴火直前期までみられる。噴火後は土器自体が激減。

安比川流域

十和田噴火前は在地的土器が主体だが、噴火後は律令的土器が増加し拮抗する。噴火直前期（Ⅲ期）、特徴的な非ロクロ成形長胴甕（口縁短外反型甕）が現れ、噴火後その数を増すとともに、太平洋側北部へ拡散する。

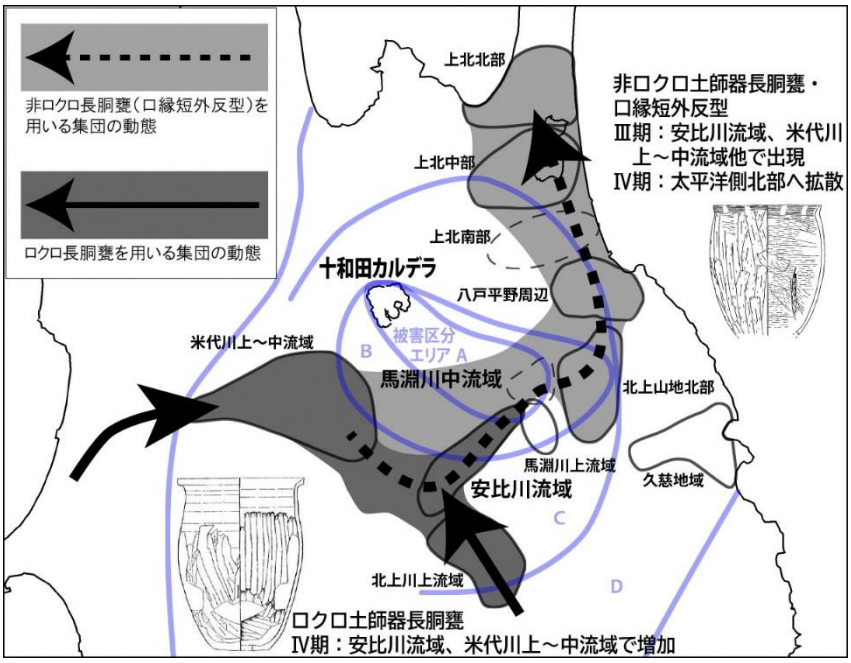


図５　煮炊具にみる十和田 10 世紀噴火後の地域動態

4．結論

- ９世紀まで、馬淵川中流域・十文字川流域（旧二戸市域）には在地色の強いエミシの大集落が継続的に存在した。
- 安比川流域（旧浄法寺町域）に本格的に集落が発達するのは９世紀以降で、それらは馬淵川中流域と比べて律令国家的な様相の強い集団であった。※ただしあくまでも“国家の外”である
- 馬淵川中流域は十和田 10 世紀噴火の降灰被害が甚大で、これを境に集落が急減する。おそらく相当数が避難したと思われ、避難先の一つが安比川最下流域（似鳥地区）であった可能性がある。
- 安比川流域の降灰被害も軽微ではなかったが、相対的にみれば集落は減少せず、逆に増加する。その移入者は、より国家的な様相の強い集団であった。この動きは奥羽山脈を挟んだ米代川上～中流域と共通し、両地域は噴火前から類似の物質文化を有することから、関連性が強かったと考えられる。あえて被災地に移入した背景には、国家側社会の要請（強制力）が強く働いたものと推定される。
- いっぽうで、もともと安比川流域（＋米代川上～中流域）に在った人々の一部は、噴火を契機に比較的被害の軽微な北方の上北中部へ移住を図った。噴火災害に対する避難行動と捉えられる。その後、彼らは上北北部へとその範囲を拡げ、独自の発展を遂げる。
- 十和田噴火後、馬淵川中流域に集落が本格的に戻るのは、おそらく 10 世紀後半になってからのことである。

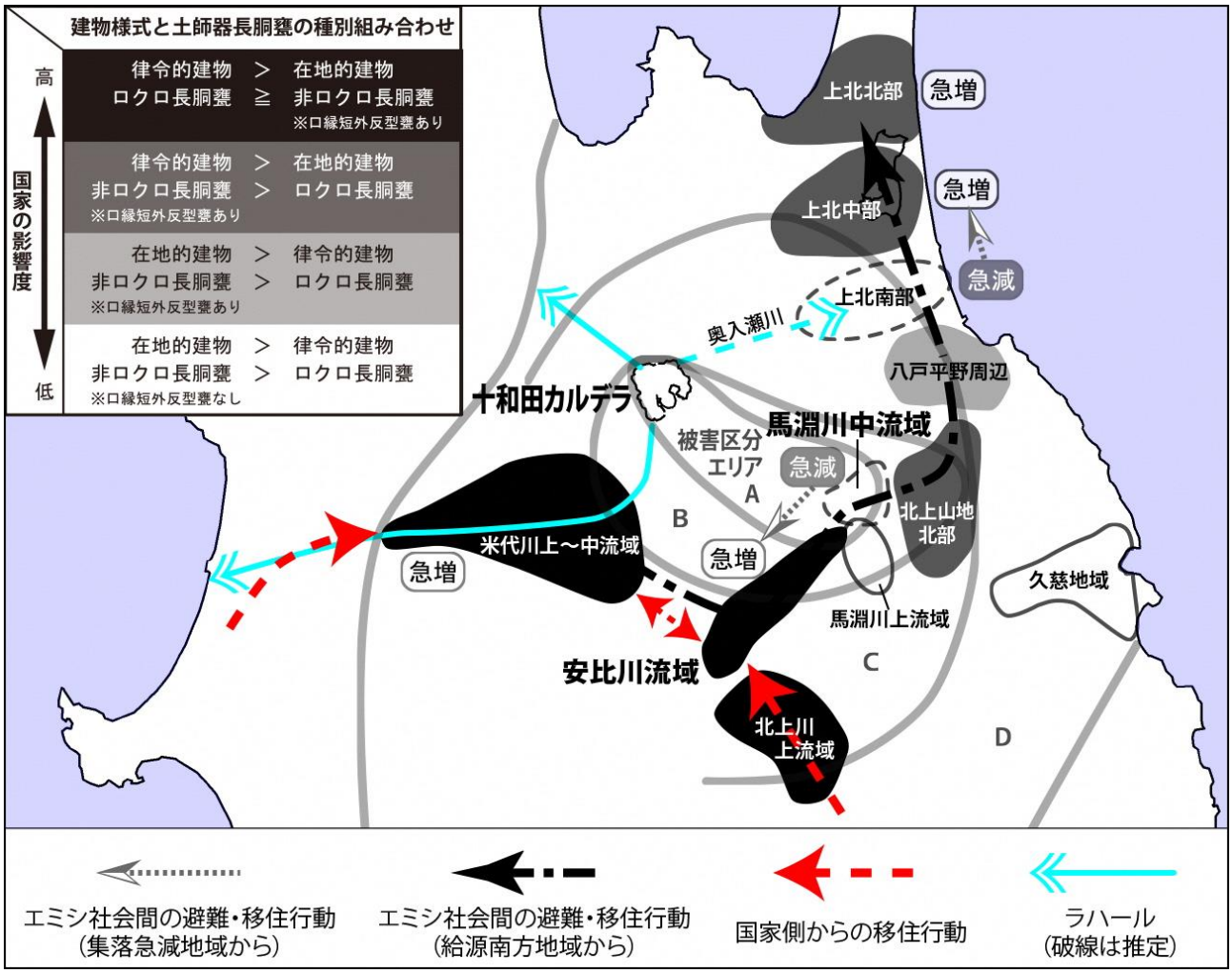
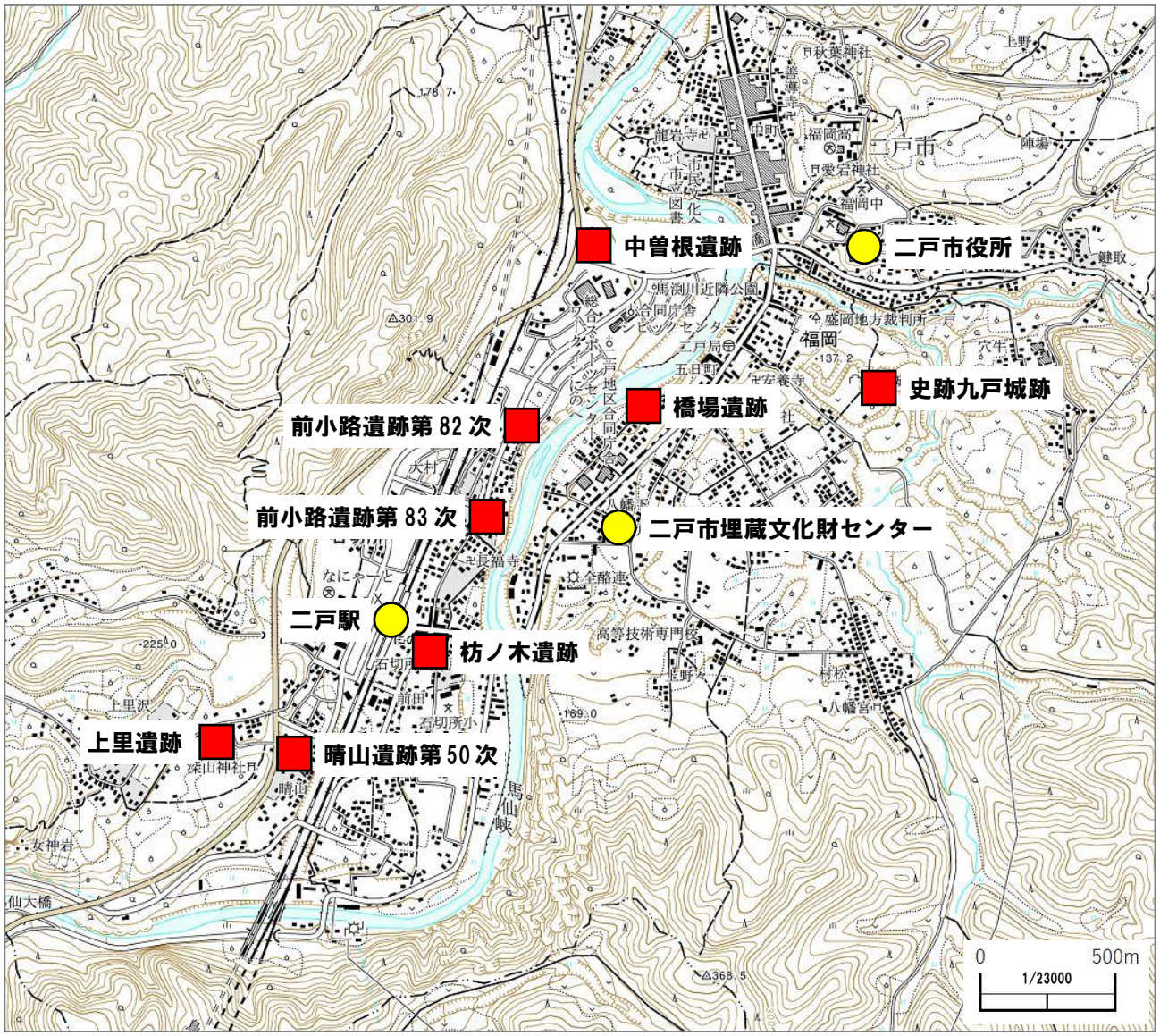


図６　十和田 10 世紀噴火による被害と各地域集団の動態

令和５年度調査報告

令和５年度調査遺跡所在地

（福岡・石切所地区）



【凡例】
・調査遺跡…
・官庁舎等…

令和５年度発掘調査の概要

１．令和５年度の発掘調査について

○史跡九戸城跡の内容確認調査　１件
○個人住宅建設に伴う調査　３件
○民間開発に伴う調査　０件
○区画整理事業に伴う調査　３件

２．令和５年度の埋蔵文化財に関する届出（令和６年２月 15 日現在）

○照　　会　127 件　→　遺跡(又は史跡)に該当：66 件
○発 掘 届　51 件
○試掘調査　37 件　→　埋蔵文化財(遺構・遺物)検出：２件
【協議の結果】盛土による保護：１件　次年度発掘調査：１件

３．埋蔵文化財の保護について

①現状保存
②盛土造成等の設計変更
③発掘調査等による記録保存

４．令和５年度の発掘調査について

①中曽根遺跡(石切所地区)：奈良時代の集落跡
②橋場遺跡(福岡地区)：縄文時代の遺物包含層
③上里遺跡(石切所館・石切所地区)：縄文時代・奈良時代の集落跡

試掘で検出された堀跡（駒焼場遺跡）

試掘状況（金田一沖）

晴山遺跡第 49・50 次調査

所　在　地	二戸市石切所字晴山地内
調査原因	土地区画整理事業
調査期間	第 49 次：令和５年４月 24 日～７月 26 日
	第 50 次：令和５年９月 19 日～10 月６日（東側地区）
	令和５年 10 月 16 日～11 月 20 日（西側地区）
調査面積	第 49 次：765.5 ㎡　第 50 次：601.1 ㎡
主な時代	縄文時代・奈良時代・中世・近世
主な遺構	竪穴住居跡、堀跡、柱穴、自然流路、近世墓、獣骨
主な遺物	縄文土器、石製品、土製品、金属製品、銭貨

①遺跡の説明

晴山遺跡は上里遺跡群の一部で、市内を北流する馬淵川が大きく蛇行する地点の北岸に位置しています。これまでの調査で縄文時代から古代、中近世まで遺構・遺物が幅広く確認されており、新しいものでは 13 世紀の青磁が出土した堀が確認されています。しかし、どの時代の建物も大きな集落を形成するほどの数は確認されておらず、長い期間を通して細々とこの地に暮らしていた様子が窺えます。

第 49 次調査区北側全景（北東から）

ＳＤ02 遺物出土状況（東から）

②調査の内容と結果

・第 49 次

遺跡の北東端に位置しています。過年度の隣接地の調査では、縄文時代に埋没した自然流路が確認され、流路内から縄文時代中期を中心とした縄文土器が多量に出土しました。

調査の結果、西から南東へ続く自然流路（ＳＤ01）と、西から東へ続く自然流路（ＳＤ02）が確認されました。ＳＤ01 は幅 4.0～7.0m、深さ 0.6～1.0m で、ＳＤ02 は幅 4.2～4.8m、深さ 0.7～0.8m でした。それぞれの流路は調査区の西側で合流しており、断面から新旧関係を確認したところ、ＳＤ02 の方が新しいことが分かりました。

流路の堆積土を確認するとどちらにも砂の層があり、そこから大量の縄文土器や石鏃・磨石などの石製品が出土しました。土器の特徴を見ると、縄文時代中期を主体としており、晴山遺跡の西側には、縄文時代前期～中期の上里遺跡があることから、上里遺跡の縄文土器が自然流路によって流れ込んだと考えられます。

調査区からは他に近世以降の土坑墓や柱穴も複数確認され、川原石や石臼を礎石がわりに使用した柱穴もありました。

・第 50 次

第 49 次の北西に位置します。区画整理事業に伴う工事と連動して発掘調査を行ったため、前半に東側地区、後半に西側地区を調査しました。第 49 次の上流にあたる自然流路を想定して調査を進めたところ、東西に進む自然流路（ＳＤ01）１条と井戸跡１基、柱穴を確認しました。ＳＤ01 は幅が 9.5～12.0ｍ、深さ 3.5～4.0ｍで、地山は白く、部分的に抉られていました。

堆積土の一番下の砂層からは、第 49 次と同様に多量の縄文土器や石製品、土製品が出土しました。縄文土器の時期も縄文時代中期が中心で、これまでの調査成果と一致します。

自然流路の南側からは井戸跡が確認され、中から獣骨が出土しました。そのほかには近世以降の柱穴を複数個確認しました。

ＳＤ01 全景（東側地区）

断面実測状況（東側地区）

ＳＤ01 全景（西側地区）

ＳＤ01 作業風景（西側地区）

史跡九戸城跡

所　在　地	二戸市福岡字城ノ内地内
調査原因	史跡整備に伴う内容確認調査
調査期間	令和５年５月 25 日～11 月 30 日
調査面積	石沢館：2,150 ㎡　二ノ丸搦手堀跡：90 ㎡
主な時代	中世・近世
主な遺構	石沢館：焼土、竪穴状遺構、掘立柱建物跡　二ノ丸搦手：堀跡
主な遺物	石沢館：陶磁器、坩堝、銭貨　二ノ丸搦手堀跡：陶磁器、溶解物、銭貨

①遺跡の説明

史跡九戸城跡は、九戸城（九戸氏の時代）と福岡城（南部氏の時代）の２つの時期に分けられます。現在、目にしている九戸城跡は、九戸城落城後に上方軍によって、北東北で最初の石垣をもつ織豊系城郭として整備され、南部氏が盛岡城に移る寛永13年（1636）まで居城した福岡城の姿です。環境整備事業の一環として平成元年度から発掘調査を実施し、これまで本丸、二ノ丸東側上下段平場、二ノ丸大手、二ノ丸搦手を調査しています。令和３年度からは九戸城期の曲輪の構造、詳細を解明するため、石沢館の内容確認調査を実施しています。令和５年度は、課題となっていた柱穴の再検出と二ノ丸搦手堀跡（ＳＤ43）の全貌を明らかにすることを目的としました。

九戸城期 明応年間（1402～1501） ～天正19年（1591）	築城期	堀（ＳＤ１）によって二ノ丸が分けられていた時期。
	改築期	堀（ＳＤ１）が埋められて以降の時期。
福岡城期 天正19年（1591） ～寛永13年（1636）		天正19年（1591）の九戸一揆後、再普請され南部氏の城として使用された時期。

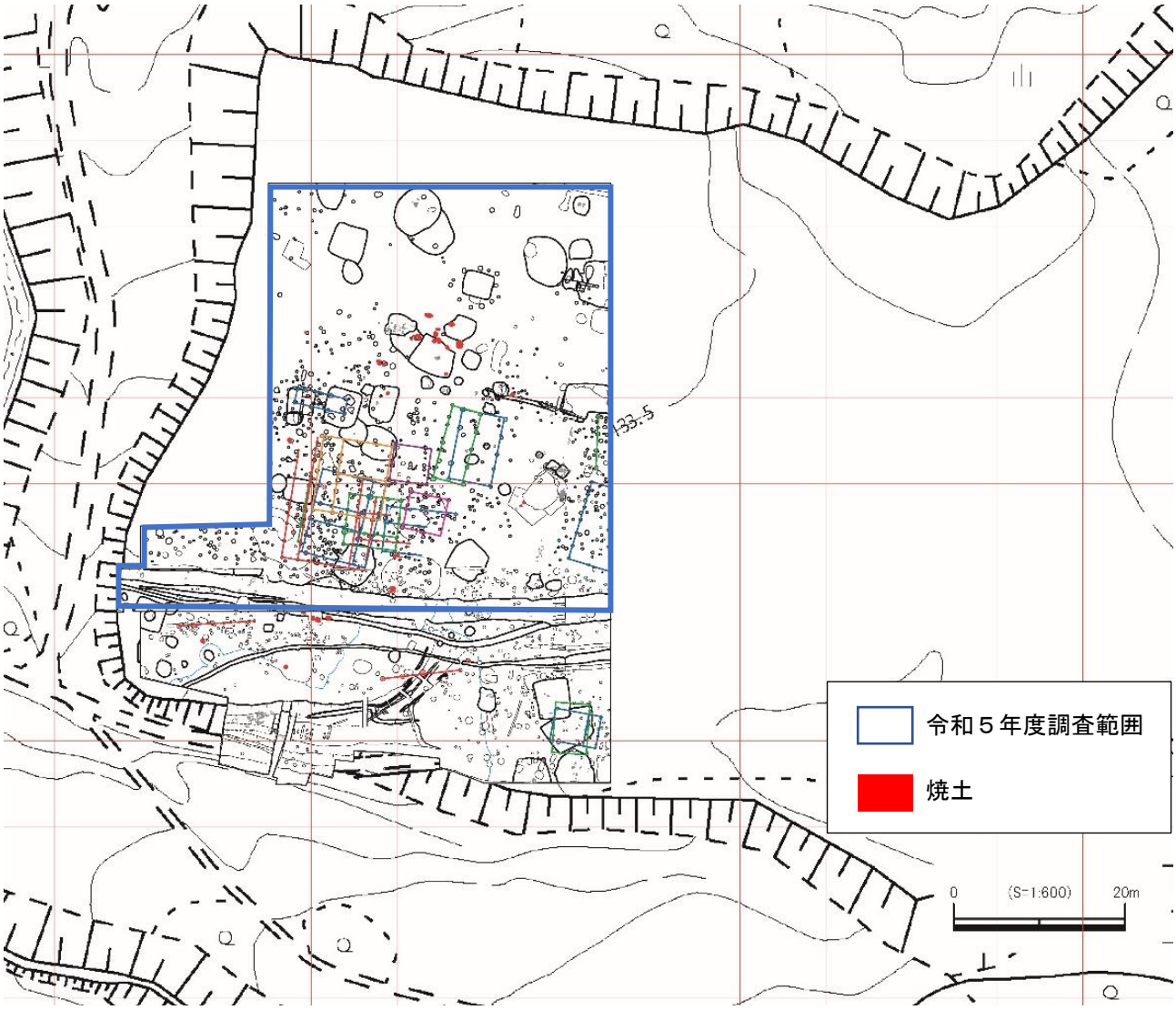
②石沢館調査の内容と結果

遺　構

城郭期（九戸城期・福岡城期）の遺構として竪穴状遺構と推定される方形の掘り込みが６基、土坑が２基、焼土13基、柱穴約700基が検出されました。城郭期以外の遺構は、縄文時代、奈良時代の住居跡が検出されています。検出された遺構の傾向から調査区の北側と南側で建っていた遺構に違いがあることが分かりました。

調査区南側は、柱穴によって構成された掘立柱建物跡は、２間四方のもの２棟、直屋 10 棟が想定されます。直屋のうち総柱１棟、内側の柱が省略された梁間３間の建物２棟、側柱のみの建物７棟に分けられます。掘立柱建物は、調査区南西部にまとまっており、建物の重複関係から５時期以上の変遷があることがわかりました。

調査区の北側約 25mの範囲では、焼土や竪穴状遺構が認められ、柱穴がほとんどみられない状況でした。



石沢館調査範囲

遺　　物

貿易陶磁器の白磁、青磁、染付皿、国産陶磁器の丸皿、折縁皿、菊皿、鉄絵皿、灰釉陶器の壺、甕、銭貨、鉄釘、坩堝などが出土しています。

出土した貿易陶磁器は、白磁内湾皿、白磁小杯、青磁無文碗、青磁線描蓮弁文碗、端反皿、染付皿Ｂ１群、染付皿Ｂ２群、染付皿(芙蓉手)が見つかっています。石沢館の利用時期は、貿易陶磁器の年代観から九戸城期の改築期(Ⅱ期)から福岡城期(Ⅲ期)が利用の中心と考えられます。

国産陶磁器は、瀬戸・美濃産の灰釉陶器である大窯２～４期のほか志野が出土しています。貿易陶磁器と国産陶磁器の年代から15世紀後半～17世紀代まで石沢館の利用が想定されます。

③二ノ丸搦手堀跡調査の内容と結果

これまでの調査成果から堀跡(ＳＤ１)は、幅 11.2m、深さ約 5.5mの薬研堀で二ノ丸東側上下段平場の段差境に沿って築かれ、九戸城築城期に機能していた堀と推定されていました。

今回の調査によってＳＤ１の堀底が、堀検出面の西端に寄っており、二ノ丸搦手側の堀跡(ＳＤ43)と合流することが確認されました。堀跡(ＳＤ43)は、二ノ丸の縁辺部に沿って検出され、法面が堀跡(ＳＤ１)を境として西側が当初の様子を良く残し、東側が近代に削平を受けていることが判明しました。

133.56
129.62
128.86
小屋
小屋
128.36
堀　跡
133.63
133.44
132.88
132.77
小屋
127.80
127.71
133.17
133.58
132.82
133.18
8-4
133.12
133.30
132.97
T.1/1/10/6
132.70
132.23
8-3
132.92
133.06
132.90
T.2/1/10/6
133.54
133.62
133.77
133.64
8-2
133.68
小屋
133.66
133.81
国分
7-1
T.2/10/6
135
130
E.38
令和５年度調査範囲
堀（ＳＤ１）範囲

二ノ丸搦手堀調査範囲

５　まとめ

二ノ丸搦手堀跡の調査から、堀跡（ＳＤ１）と堀跡（ＳＤ43）が同規模の堀跡であることが確認されました。ＳＤ１の埋土がＳＤ43 との合流部分で途切れることからＳＤ１埋没後もＳＤ43 は、機能していたと考えられます。

石沢館は、出土した貿易陶磁器、国産陶磁器から、15世紀後半～17世紀初頭が利用時期の中心であったと想定されます。城郭期の遺構として、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、焼土が検出され、堀跡（３ＳＤ01）に近い南側に掘立柱建物跡、北側に竪穴遺構が集中し、遺構の種類ごとに分布範囲に偏りがあることが確認されました。

特に建物の規模や軸の方向から、主殿や家臣の屋敷が並ぶ居住域というよりも倉庫や工房などが並ぶ空間として利用されていたと推測されます。調査区東側まで建物がのびている可能性があることから、調査区より東側が主要な居住空間であった可能性が高いと考えられます。

竪穴状遺構（ＳＩ９）（東から）

溝跡（４ＳＤ01）（東から）

石沢館調査区全景

令和５年度調査報告（紙上報告）

枋ノ木遺跡（第１次）

中曽根遺跡

橋場遺跡

前小路遺跡（第 82・83 次）

上里遺跡（石切所館）

枋ノ木遺跡（第１次）

所　在　地	二戸市石切所字枋ノ木地内
調査原因	土地区画整理事業
調査期間	令和５年４月 17 日～５月 15 日
調査面積	141.0 ㎡
主な時代	縄文時代・古代（９世紀末～10 世紀初頭）・近世
主な遺構	竪穴状遺構、土坑墓
主な遺物	縄文土器、石製品、土師器

①遺跡の説明

枋ノ木遺跡はＪＲ二戸駅の東側に位置する遺跡です。平成 16 年に新規発見された遺跡で、当時の発掘調査では、主に近世の掘立柱建物跡が確認されました。その後は区画整理事業に伴い試掘調査を継続して行っていましたが、令和４年度の試掘調査で白色火山灰を含む遺構が確認されたため、今年度、発掘調査を実施しました。

②調査の内容・結果

調査の結果、隅丸方形の竪穴状遺構と、近世墓４基、縄文時代中期以降の遺物包含層が確認されました。竪穴状遺構は調査区の中央に位置し、事前の試掘調査で発見されたものです。貼床やカマドは確認されなかったので、住居ではなかったと考えられます。

調査区の西側は白色火山灰（十和田ａ火山灰）による自然堆積層が検出され、その下から十和田ｂ火山灰を含む黒色土の遺物包含層を確認し、縄文時代後期～晩期を主とした土器片が大量に出土しました。また、縄文土器のほかには石製品、土師器、金属製品、銭貨などが出土しました。

これまで中近世の集落跡として認識されていた枋ノ木遺跡ですが、古代の遺構と縄文時代の包含層が確認されたことで、縄文時代から長く続く複合遺跡であることが分かってきました。今後の調査成果によって、遺跡の様相が明らかになるでしょう。（大坪）

一時検出面（北から）

基本層序確認状況

中曽根遺跡

所　在　地	二戸市石切所字中曽根地内
調査原因	個人住宅建設に伴う緊急発掘調査
調査期間	令和５年４月 17 日～５月 26 日
調査面積	95.2 ㎡
主な時代	古代(奈良時代)
主な遺構	竪穴住居跡、土坑
主な遺物	土師器、土製品(土玉・紡錘車)、石製品、陶磁器、縄文土器

①遺跡の説明　中曽根遺跡は二戸市立図書館から合同庁舎の西側に広がる遺跡です。昭和 53～55 年度に行われた国道４号線中曽根交差点建設に伴う発掘調査の際に、縄文時代と奈良時代の大集落であったことがわかりました。近年の調査では、奈良時代の竪穴住居跡ともに平安時代の竪穴住居跡も確認されています。

②調査の内容・結果　今回の発掘調査は、試掘調査を行った際に、竪穴住居跡と埋土と思われる白色火山灰と土師器が見つかったことから、発掘調査を行いました。また、調査区が狭小であったため、東側の調査終了後、埋め戻して西側の調査を実施しました。

その結果、奈良時代の竪穴住居跡１棟、土坑１基を確認しました。竪穴住居跡は東側で確認されました。５ｍ四方の竪穴住居跡で、カマドが西壁に作りつけられていました。壁の残存状況は良好で、埋土内には土師器片が多く含まれ完形の土師器甕が出土しました。土坑は西側で確認されました。1.5m四方の方形で、土師器甕とともに、土玉が多く出土しました。（鈴木）

東側調査区全景

西側調査区全景

竪穴住居跡カマド全景

土坑遺物出土状況

橋場遺跡

所　在　地	二戸市福岡字橋場地内
調査原因	個人住宅上下水道工事に伴う緊急発掘調査
調査期間	令和５年５月 29 日～６月５日
調査面積	20 ㎡
主な時代	縄文時代(晩期)
主な遺構	遺物包含層
主な遺物	縄文土器、石器、岩偶

①遺跡の説明　橋場遺跡は、二戸駅から約 1.2km 北東に広がる遺跡で、馬淵川が遺跡の西側に北流しています。過年度に調査から、縄文時代晩期の遺物包含層とともに竪穴住居跡が確認されています。

②調査の内容・結果　今回の発掘調査は、周辺で縄文時代晩期の遺物包含層が確認されていることから、重機で表土剥ぎを行った後、検出作業を行い遺物の出土状況を確認しました。

その結果、調査区の東側で、自然堆積の白色火山灰下にて黒色土の遺物包含層が確認されました。

遺物は縄文時代晩期中葉を中心とした縄文土器とともに、石鏃や柔らかい凝灰岩を削った岩偶などが出土しました。（鈴木）

東側調査区全景

東側調査区断面

縄文土器

岩偶

前小路遺跡（第 82・83 次）

所　在　地	二戸市石切所字前小路・森合地内
調査原因	土地区画整理事業
調査期間	第 82 次：令和５年７月 11 日～８月 30 日　第 83 次：８月 29 日～11 月 30 日
調査面積	第 82 次：337.2 ㎡　第 83 次：664.3 ㎡
主な時代	古代（９世紀末～10 世紀初頭）・近世
主な遺構	竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、溝跡
主な遺物	土師器、須恵器、石製品、金属製品、銭貨、土製品、縄文土器、炭化物

①遺跡の説明

前小路遺跡はＪＲ二戸駅の北側に広がる遺跡です。平成 13 年度から区画整理事業によって継続して発掘調査が行われ、９世紀末～10 世紀初頭の集落跡であることが分かっています。これまで 200 棟近い竪穴住居跡や、集落を囲む堀跡が確認されました。遺物は土師器、須恵器、金属製品などが出土しており、その中には久慈産と思われる琥珀製品や塩作りで使用された製塩土器もあり、沿岸との交易も想定されます。

近年、縄文時代の遺構や遺物、奈良時代の竪穴住居跡、中近世の竪穴遺構も出土していることから、長期間にわたり集落として使用されていたと考えられます。

②調査の内容・結果

調査の結果、第 82 次調査では竪穴状遺構２棟、土坑 10 基、不明遺構、柱穴多数を確認しました。遺跡は全体的に削平を受けていたほか、大きく攪乱を受けていました。その中でも比較的残存していた北側と南側から遺構が確認されました。竪穴状遺構からは貼床や周溝、柱穴が検出されず、時期などの詳細は不明です。柱穴からはガラスや丸釘などが出土したので、近現代の遺構と考えられます。

第 83 次調査では、竪穴状遺構７棟、焼土遺構３基、土坑１基、不明遺構、柱穴多数を確認しました。第 82 次調査と同様に遺跡は大きく削平され、耕作痕によって全体が攪乱を受けていました。竪穴状遺構からカマドが確認されなかったので、住居ではなく、倉庫や工房などの作業場として使用されたと考えられます。硬質面だけが確認された場所もあり、本来は多くの竪穴住居跡や竪穴状遺構が存在していた可能性があります。

遺物は、土師器や須恵器が出土したほか、縄文土器、土製品、石製品、金属製品、銭貨、炭化物を確認しました。（大坪）

調査区全景（第 82 次）

ＳＸ03 土器出土状況（第 83 次）

上里遺跡（石切所館）

所　在　地	二戸市石切所字野中地内
調査原因	個人住宅建設に伴う緊急発掘調査
調査期間	令和５年７月 26 日～８月 28 日
調査面積	90 ㎡
主な時代	縄文時代・古代(奈良時代)
主な遺構	竪穴住居跡
主な遺物	土師器、石製品、縄文土器

①遺跡の説明

上里遺跡は二戸駅の西側に広がる遺跡です。昭和 54 年度に行われた国道４号線建設に伴う発掘調査の際に、中世城館の空堀とともに、縄文時代前期初頭から中期前葉の集落跡が確認され、住居内の貯蔵穴からは合葬された人骨が出土しました。近年の調査では、縄文時代中期前葉から後葉の遺物包含層と竪穴住居跡が確認されています。

②調査の内容・結果

今回の発掘調査は、現地確認を行った際、縄文土器が表面採取できるような状況だったため、縄文時代の竪穴住居跡や遺物包含層の確認を想定して、発掘調査を行いました。

その結果、縄文土器の出土は限られ、奈良時代の竪穴住居跡を１棟確認しました。竪穴住居跡は南東側が調査区外でしたが、一辺が 3.2mの規模で北西壁にカマドが作り付けられていました。住居内からは土師器が出土しました。　（鈴木）

調査区全景

竪穴住居跡

調査状況

土師器（坏）

語句説明

■ 遺構（いこう）　竪穴住居など地上に残された生活の痕跡のこと

■ 遺物（いぶつ）　土器、石器などの生活道具のこと

■ 攪乱（かくらん）　遺構などが、新しい時代の耕作などによってかき回されている状態

■ 地山（じやま）　自然のままの土、地盤のこと

■ 検出（けんしゅつ）　土をきれいにして遺構の土を見やすくする作業のこと

■ 竪穴住居（たてあなじゅうきょ）　縄文時代から古代に見られる地面を掘り窪めて床とした住居のこと

■ 竪穴状遺構（たてあなじょういこう）　主に中世以降の竪穴式の建物をさし、工房などに使用された

■ 掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）　地面に穴を掘り、礎石を用いずに柱を建てた建物のこと

■ 土坑（どこう）　貯蔵などに用いられた様々な形の穴のこと

■ 土師器（はじき）　古代に使用された素焼きの土器

■ 須恵器（すえき）　窯を用いて高温で焼かれた硬質の土器

■ 曲輪（くるわ）　本丸や二ノ丸など城を構成する区画のこと

■ 薬研（やげん）　生薬などの薬材をひいて粉末化する道具で、舟形の溝を彫った石臼のこと。断面の形がＶ字になっていることから、Ｖ字の堀のことを薬研堀と呼称している